

63年ぶり、涙の再会

一時帰国し、弟の左衛門太郎さんと抱き合つて再会を喜ぶ上野石之助さん（手前）



ウクライナに生存の本町出身者 上野石之助さん帰郷

20歳で樺太（サハリン）へ出征し、終戦後消息不明となっていた、本町明戸地区出身の元日本兵・上野石之助さん（83）が、ウクライナで生存していることが確認され、4月19日、一時帰国しました。翌20日、63年ぶりに故郷を訪れた上野さんは、きょうだいや親族と無事再会を果たしました。戦争という悲しい運命によって生き別れとなった肉親が、強いきずなによって奇跡の再会を果たすまでの経過と、帰郷後の様子取材しました。

■20歳で樺太へ出征

上野石之助さんは、二十歳だった昭和十八年五月に応召し、樺太へ。同二十年八月、所属する陸軍部隊は最前線八方山での戦闘で玉砕。上野さんは消息不明になりました。終戦後、生存情報が寄せられ調査しましたが、生存が確認できないことから、平成十二年に盛岡地裁で戦時死亡宣告が確定しました（注①）。

外務省関係者の面談聴取によると、その後の上野さんは現地人の援助を得て樺太からハバロフスクへと渡り、現地の女性と結婚。昭和四十年、妻の出身地であるウクライナ



20歳ごろの上野石之助さん。終戦の8月15日以降も激戦が続き、玉砕した陸軍歩兵第125連隊の上等兵として、最前線での守備にあたっていたという

の都市ジトミル（人口約二十七万人）に移住。一男二女をもうけ、「エニザワ・イシノスキー」と名乗っていました。

■長男と2人で帰郷

四月二十日、岩手県庁を訪れた上野さんは、六十三年ぶりに弟の左衛門太郎さん（81）と上明戸から親族と再会を果たしました。十九日の帰国後、東京都内に一泊した上野さんは、二十日午後、新幹線で盛岡に着。長男のアナトリーさん（37）とともに、親族の待つ

●一時帰国までの主な経過●

昭和18年7月	◆陸軍歩兵第125連隊員として樺太に派遣。
同20年8月	◆ロシア軍の侵攻による部隊玉砕後、消息不明に。
（時期不明）	（現地人の援助を得て、サハリンから、ハバロフスクへと移り、現地の女性と結婚。）
（昭和33年）	（引き揚げ者から上野石之助さんの生存情報があったが、それ以降消息不明（生死不明）となる。）
同40年	◆妻の出身地であるウクライナへ移住。
平成10年	◆生存情報が確認できないことから、親族から死亡宣告同意書が提出。
同12年4月	◆盛岡家庭裁判所において戦時死亡宣告が確定。
同17年10月	◆知人を通じて上野石之助氏から親族調査の要請。
12月	◆親族により本人の生存が確認。
同18年4月	◆長男と2人で一時帰国が実現。

「どんなことがあっても生きていく
ただ、それしかなかった」

県庁の知事室に入室。丑太郎さんの顔を見ると、思わず指差して歩み寄り、固く抱き合いました。妹の下城ハナエさん（75）と八木北町と上野タケさん（69）と明戸開拓とも、涙を流しながら抱き合いい、ロシア語で「私のかわいい弟・妹よ」と声を掛けました。上野さんは「感動で言葉も出ない」と、再会の喜びをかみしめました。

丑太郎さんは「何とも言えない。涙だけです」、下城さんは「何を言っているのか分からない」と声を詰まらせた。おいの上野幸夫さん（59）と上明戸は「祖母が言っていたとおり優しい人。感激している」と喜びを話しました。

増田寛也県知事と懇談した後、上野さんは、大戦後の経過について「どんなことが

あっても生きていく。ただ、それしかなかった」と話し、帰国に六十二年かかったことについては、「あまり答えたくない。ただ、運命だったと思う」と、激動の人生を言葉少なに語りました。

【注①戦時死亡宣告】

未帰還者に関する特別措置法に基づき、旧樺太や旧満州などからの未帰還者が死亡したと推定できる場合、厚生労働大臣が家族の同意を得て民法による失踪（しっそつ）の宣告を家庭裁判所に請求。宣告を受けた未帰還者は法的に「死亡した」とみなされ、戸籍から除籍される。